

# Kumamoto Regional Medical Center

熊本地域医療センターだより

Nexus

## TOPICS ▶ 尿路感染症診療への当院の取り組み

基本理念:かかってよかった。紹介してよかった。働いてよかった。そんな病院をめざし、地域社会に貢献します。



## 令和8年度 熊本地域医療センター連携の会 開催について

**日時** 9月25日(金) 18:00～

**場所** 熊本ホテルキャッスル

● **講演会** 18:30～ キャッスルホール A

「当センターの現況について」………院長 **杉田 裕樹** 医師

「地域医療連携室の取り組み」………緩和ケア科部長 兼 地域医療連携室長 **安部 英治** 医師

「診療科紹介」

● **懇親会** 19:30～ キャッスルホール BCD

事前に出欠をいただいておりますが、変更がございましたら下記へご連絡ください

**☎ 096-366-1323** 熊本地域医療センター 地域医療連携室直通

## 市民公開講座のおしらせ

今年も下記の日程で「熊本地域医療センター 市民公開講座」を開催することとなりました。  
詳細、お申し込み方法につきましては、同封いたしました別紙お知らせをご覧ください。

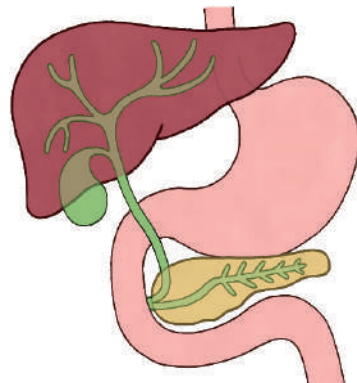
### 「怖いけれど、もっと知ってほしいすい臓がんのこと」

**日時** 12月5日(土)

**会場** 熊本地域医療センター 新館6階ホール

**開場** 13:30 **開演** 14:00 **終了** 15:30 (予定)

**定員** 100名 **参加費** 無料



## 熊本地域医療センター勉強会のお知らせ

**日時** 2026年9月28日(月) 19:00～20:00

**形式** ハイブリッド方式 オンライン参加 or 会場参加

オンライン参加: ZOOM 会場参加: 新館6階ホール

### 申込方法

kumamotochiiki@gmail.com(※1) まで  
メールにて「所属医療機関名」および「氏名」  
を記載し、お送りください。(後日、詳細な  
参加方法についてご案内いたします。)



(※1) メール作成用 QR コード

### 症例報告

『膵神経内分泌腫瘍 G1、術後多発肝転移に対し集学的  
治療にて完全寛解し得た1例』

外科 **安部 禎人** 医師

### 特別講演

『大腸腫瘍に対する内視鏡治療』  
CC「O」:「最新のトピックス・その他」

消化器内科 **脇 幸太郎** 医師

Kumamoto Regional Medical Center



熊本市医師会  
熊本地域医療センター

〒860-0811 熊本市中央区本庄5丁目16番10号  
TEL 096-363-3311 FAX 096-362-0222  
https://krmc.city.kumamoto.med.or.jp/



◆ 紹介や転院調整 ◆  
090-2964-0600



◆ 外来の予約 ◆  
090-9472-1177



◆ 検査の予約 ◆  
096-366-1323

# 尿路感染症診療への当院の取り組み

小児科医長

日高 優子  
Yuko Hidaka

- ・小児科一般
- ・小児腎臓病学
- ・日本小児科学会（専門医）
- ・日本小児科学会（指導医）
- ・日本腎臓学会（専門医）
- ・小児科難病指定医
- ・小児科慢性特定疾病指定医

小児の上部尿路感染症は、乳幼児の発熱原因として日常診療で頻繁に遭遇する感染症です。特に乳児では発熱以外の症状に乏しいことが多く、原因不明の発熱として受診する症例も少なくありません。一部の症例では急性巣状細菌性腎炎（Acute focal bacterial nephritis：AFBN）や腎膿瘍など重症感染症を呈することがあります。また、背景に膀胱尿管逆流症（Vesicoureteral reflux：VUR）を有する症例では尿路感染症を繰り返しやすく、腎瘢痕の形成や逆流性腎症を来すことで、将来的に蛋白尿や腎機能低下につながることもあるため、適切な診断と早期治療が重要です。

当院では2023年4月から2026年3月までの3年間に81例の上部尿路感染症を経験しました。約3分の2を乳児例が占め、乳児では男児に多くみられました。（図1参照）

起 因 菌 は大腸菌が最も多かったものの、Klebsiella 属や Enterococcus 属など、大腸菌以外の起 因 菌 による症例も一定数認められました。また、大腸菌の約20%はESBL産生菌でした。このような菌種・耐性菌の分布を踏まえ、尿培養結果に基づいた適切な抗菌薬を選択しています。

以前は、初回有熱性尿路感染症後にVURの有無を評価するため、排尿時膀胱尿道造影（Voiding cystourethrography：VCUG）が広く施行されてきました。しかし、近年では、低グレードVURを初回から積極的に診断・治療することによる臨床の有用性が限定的であることが示されるとともに、VCUGはカテーテル挿入に伴う侵襲性や放射線被ばくを伴うことから、その適応を慎重に判断することが重要とされています。そのため現在では、超音波検査で尿路異常を疑う所見を認める症例や、反復性尿路感染症、非典型例など、VURの存在が治療方針や予後に影響すると考えられる症例に限定してVCUGを施行する方針が、国際的なガイドラインでも推奨されています。当院でも3年間で12例にVCUGを施行しており、適応を慎重に判断したうえで検査を実施しています。また、より専門的な評

両側膀胱尿管逆流症

急性巣状細菌性腎炎

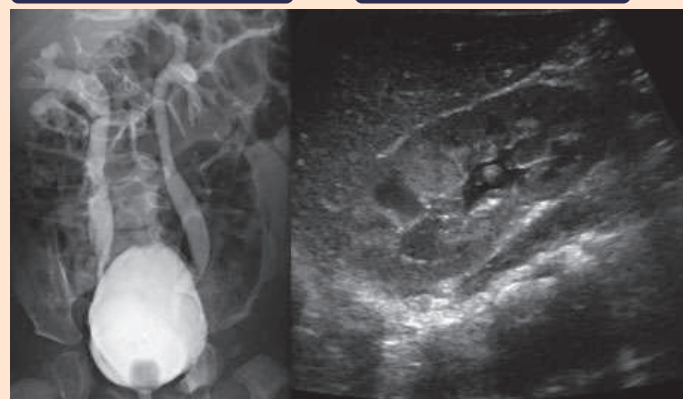


図1

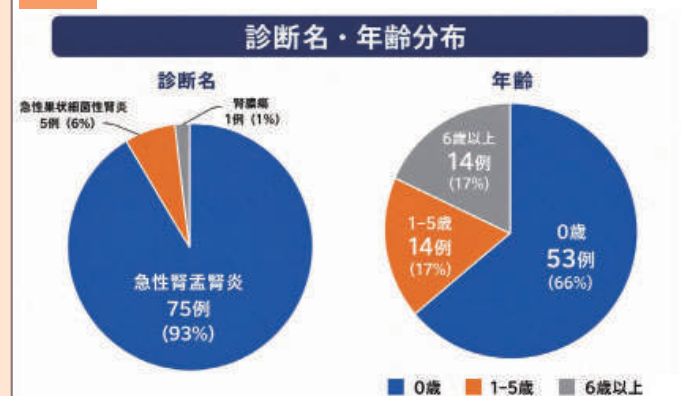
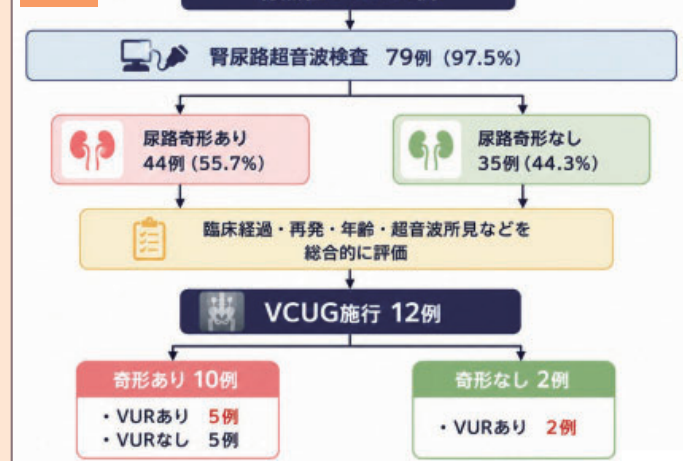
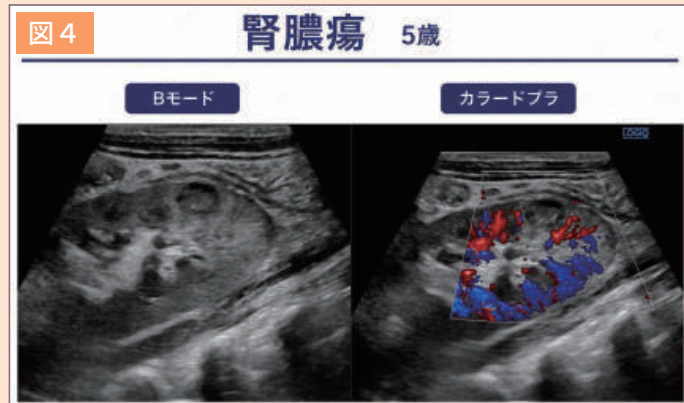
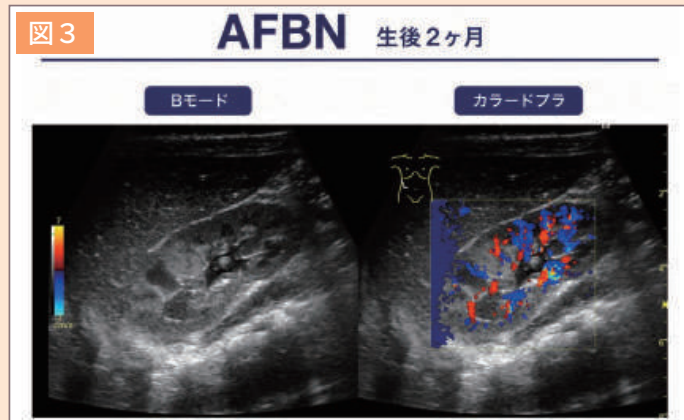


図2



価や継続的な診療が必要と判断した症例については、小児腎臓・泌尿器専門医療機関と連携し、VCUGを含めた精査・加療を依頼しています。（図2参照）

腎・膀胱超音波検査（Renal and bladder ultrasound：RBUS）は、尿路感染症診療において重要な検査です。尿路奇形の評価に加え、腎腫大や腎実質の変化など急性腎盂腎炎を示唆する所見を捉えることができます。また、AFBNでは腎腫大に加え、限局性の実質エコー変化や局所的な血流低下を認めることがあり、重症例を早期に疑うきっかけとなります。近年の国内報告でも、AFBNの診断にRBUSが有用であったと報告されています。当院では81例中79例（97.5%）に超音波検査を施行し、その結果、AFBN 5例、腎膿瘍1例を診断しました。（図3・図4参照）



当院では、熟練した超音波検査技師が小児に精通した質の高い超音波検査を日常的に実施しています。発熱患児の原因検索の段階から超音波検査を積極的に診療へ取り入れており、熱源が明らかでない症例では、腎実質の異常エコー所見や腎腫大、尿路拡張などの尿路異常を契機に尿路感染症を疑い、迅速な尿検査や治療につなげています。また、AFBNや腎膿瘍などの重症例の早期診断にも有用であり、適切な抗菌薬投与期間の設定や追加画像検査の必要性を判断する上でも重要な役割を果たしています。

小児の有熱性尿路感染症診療では、適切な初期診断・治療を行い、将来的な腎障害を予防することが重要です。当院では、超音波検査を積極的に活用しながら、地域の先生方と連携して診療に取り組んでいます。発熱のみで原因がはっきりしない乳幼児や、尿路感染症が疑われる症例、診断や治療方針にお悩みの症例がありましたら、ぜひご相談ください。今後も地域の先生方と連携しながら、質の高い診療を提供し、地域医療に貢献してまいります。